COLUMN

日本建築文化の底流　建築業協会賞（BCS賞）創設50周年に寄せて

松村秀一（東京大学教授）

第49回建築業協会賞（BCS賞）授賞式．2008年11月19日，パレスホテルにて．*
*写真提供：（社）建築業協会

まつむら・しゅういち
1957年兵庫県生まれ／1980年東京大学工学部建築学科卒業／1985年同大学大学院工学系研究科建築学専攻修了／1986年同大学講師／1990年同大学大学院工学系研究科建築学専攻助教授／2006年～東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授／ローマ大学，トレント大学，南京大学，大連理工大学，モントリオール大学にて客員教授を歴任．

「全員野球」を顕彰する

この夏，政権交代があった．今は鳩山首相の下，民主党中心の内閣が動き始めたばかりで，報道によれば大多数の国民は新しい政策の実行に期待を持ちながらもおおむね様子見といったところだろうか．さて，その組閣にあたっての新首相の言葉で印象に残っているのが「全員野球」．実は，総選挙で大敗を喫した自民党の総裁選に出馬した谷垣さんも，街頭演説でしきりに「全員野球」を強調していた．負けるとグズグズに泣きながらグラウンドの砂を袋に入れて帰郷しなければならない甲子園球児たちに対する愛情と戒めの入り混じった言葉として，主に高校野球の監督が使うものだと認識していた．それだけに，大人の，しかも政治の世界でこの言葉が使われているのを耳にして，少々意表を突かれたのである．これはよほどのことだ．これも日本的な表現だが，「おイエの一大事」だというある種の切迫感が，政治家にこの言葉を使わせ，またマスコミにも特段の違和感を抱かせなかったのだろうと想像する．

私が「全員野球」と評した理由がお分かりいただけると思う．設計者がどんなに意欲的に取り組んだ作品を応募しても，施工者が凡庸な取り組みをしていたのでは賞に値しないことになるし，この両者がどんなによい仕事をしても建築主の熱意が中途半端だったり，当初の意図にそぐわない運営しかされていない場合は，やはり授賞は難しい．「全員野球」．実に日本的な賞である．

「UKEOI」と「イエ社会」

いつだったか，英国の建築技術者から，日本の自動車メーカーの欧州工場建設に参加して腰を抜かすほど驚いたという話を聞いたことがある．曰く，

「発注者である自動車メーカーの社員と設計・施工を請け負った総合建設会社の担当者が，来る日も来る日も同じオフィスで机を並べて仕事をしていたんです．英国では，利害が対立することのある発注者と受注者が机を並べて仕事をする光景など見たこともありませんでしたし，そもそも身分が違う．ですから初めはとても信じられない気持ちでいました．けれどもしばらく付き合っていて分かったんです．彼らは一致した目標を持って仕事をしているということが．利害が対立するどころか，発注者も受注者もただよい工場をつくろうという一心で仕事をしていたのですね．高い質を持つ日本建築の謎が解けたような気がしました」

この「全員野球」と称し得る建築行為の日本的なあり様は，長い歴史に根差した独自の文化と言ってよいものだ．その文化の背景には少なくともふたつの歴史的な事柄がある．ひとつは，英語にも適切な訳語がなく「UKEOI（請負）」とされる，建築主と設計・施工業者間の独特な契約関係の成立とその継続であり，いまひとつは，日本の企業の行動様式を理解する上でのキー・コンセプトとしてよい意味でも悪い意味でも用いられてきた「イエ社会」意識の存在である．

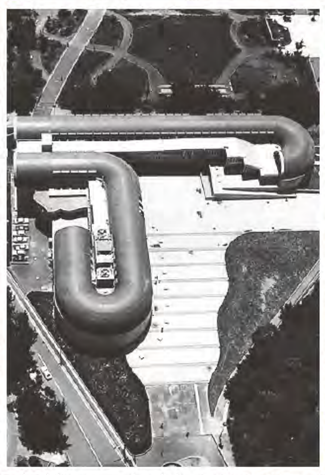
建設請負の初期の実例として知られる「美濃南宮神社の造営時の請状」（1640年）は，UKEOIにおける建築主と請負業者間の関係を顕著に示している．詳細な解説は他書に譲るが（たとえば市ヶ谷出版社刊

建築とはあまり関係のない話から始めてしまったが，今回「建築業協会賞（以下、BCS賞）について原稿を」と依頼されてすぐに頭に浮かんだのがこの「全員野球」という言葉である．BCS賞がBCS賞たる所以は，それがよくある建築設計者の業績を讃えるものではなく，建築主・設計者・施工者のいわば三位一体の努力とその成果を顕彰するところにある．BCS賞は建築界の「全員野球」を讃える賞なのである．

幸いにも私自身，日本の建築界を代表するふたつの賞，日本建築学会賞とBCS賞の選考委員を務めた経験がある．このふたつは，書類審査で授賞候補を絞った後に現地審査を行うプロセスは同じだが，その中身がかなり異なる．学会賞と比べた時のBCS賞の「らしさ」は次の2点である．

- 審査にあたっては，設計内容以外に施工体制やそこで用いられた技術，工事費内訳，竣工引渡し後の施設の運営状況などが審査の対象になる．
- 現地審査には，建築主，設計者，施工者，さらには施設の運営担当者などが揃い，それぞれの立場から審査対象建築の説明を行う．

左・右上：第1回BCS賞授賞式．1960年（昭和35年）11月．第1回BCS賞は，大江宏，谷口吉郎，土浦亀城，村野藤吾の各氏らの選考によって「日本電波塔（東京タワー）」など10作品が選出された．* 右下：受賞第1号「日本電波塔」に設置された受賞パネル．



左：第1回受賞作品「日本電波塔（東京タワー）」（1958年竣工，右奥）と第10回受賞作品「霞が関ビルディング」（1968年竣工，左）．1968年撮影．　中左下：第17回受賞作品「北九州市立中央図書館」（1975年竣工）．　中上：第29回受賞作品「ヤマトインターナショナル」（1987年竣工）．　中右下：第33回受賞作品「東京都庁舎」（1991年竣工）．　右：第50回受賞作品「多摩美術大学図書館（八王子キャンパス）」（2007年竣工）．　撮影：本誌写真部（特記を除く）　全受賞作品801点の情報は（社）建築業協会のHP（http://www.bcs.or.jp/）で閲覧可能．

『建築生産』5章2節の遠藤和義氏による解説），この請状には，顧客満足度を最優先し，それが達成されなければ徹底的に責任を取るという請負業者側の姿勢が痛々しいまで具体的に表明されている．「○○家」とお抱えの職人あるいは出入りの職人との「イエ社会」的な関係性も，これと同種の建築行動規範を形成する要因となったであろう．この個々の利害を超越したような人あるいは組織間の関係こそ，近代以前からの日本の建築文化の底流であり，「全員野球」を顕彰するBCS賞は，いわば現在においてもその底流が続いていることの証とみなすことができる．

BCS賞審査の経験

さて，そんなBCS賞の審査だが，これは辞めたくないほどおもしろいし，そのおもしろさがこの賞自体の性格を物語っていると思う．

先述したように書類審査を経て候補を絞り込んだ後現地審査に赴くわけだが，12名の選考委員が3名1組の計4組に分かれて行動する．その3名の組み合わせは4組すべてに共通していて，設計を生業としている建築家1名，BCSの会員である大手総合建設会社の設計部門から1名，そして私のような大学関係者1名である．このトリオ構成は，なかなか絶妙である．正直，私のような大学関係者が混じっていることの良し悪しは判断できないが，専業の設計者と総合建設業の世界で年季を積んできた設計者とでは，立場も判断基準も微妙に異なる．候補作は全国各地に散在するから，現地審査のために何度か3名が一緒に旅をするのだが，そうした車中や食事の時に，候補作の評価以外にも建築談義に花を咲かせる．そうした機会にそれぞれの判断基準の微妙な違いが現れて興味深い．

ただ，私がいちばんおもしろいと思ったのはこのことではなく，どの候補作がBCS賞にふさわしいかをじっくり話し合う場面では不思議と意見が一致するという事実である．明治期に西洋式の利害対立を前提とした契約社会の考え方が建築界に導入されて以来，設計職能の確立の理念とも関連して，いわゆる専兼問題が度々熱く議論されてきた経緯がある．専業者だけの呑み会に顔を出すと，誰かが総合建設会社設計部のことを口悪しく語る場面に何度となく遭遇したことがある．逆に総合建設業設計部の方々と酌み交わす時には，専業者の設計内容を酷評する人に出会うこと自体そう珍しいことではない．しかしながら，BCS賞選考における建築の総合的な評価では，設計専業者の判断と設計・施工兼業者の判断，さらには私のような大学関係者の判断が一致するのである．少なくとも私にとっては，立場は違えども建築の文化的な背景を共有しているということを実感できる，あるいは建築の文化的な背景の存在を確信できるとても貴重な機会だった．

再び「全員野球」について

1960年（昭和35年）の第1回から50年分のBCS賞受賞作品のリストを見てみると，最初に「日本電波塔（東京タワー）」が載っている．今さらながら「なるほど」と思う．仕事の急増が建築に関わる業務の専門化と分業化を推し進め，相互の無関心を助長することになった高度経済成長期の直前にこの賞ができたことの意義は大きい．この半世紀の間，私のように，立場が違う者同士でも建築の文化的な背景を共有していることを実感し，あるいはその存在を確信した選考委員は相当数いただろう．しかも，多くの選考委員が各界で指導的な立場にある人びとである．これらの人びとが，分野間の無用な障壁の形成に抗する感覚を各所で知らず知らずのうちに広めたものと想像する．このことに，働く場所や立場は違っても建築設計者や建築技術者は結局同じ建築教育を受けてきた者たちだというあまりにも日本的な特殊性が加わることで，日本の建築界独自のえも言われぬ統合性が今日まで保持されてきたのではないかと思う．

このえも言われぬ統合性は時に保守的な馴れ合いと批判されることもあるが，利害対立に意識的な人同士が立場の違いを前提としながらもクールにプロジェクト・チームを組織し建築にあたる世界よりは遥かに心地よいし，充実感にも満たされやすいというのが私の考えだ．もちろん，この種の馴れ合い社会は閉鎖的で内向きなものになりやすい．この閉鎖性と内向性は，その産業界が一致団結して確たる基盤を築く成長段階では効果的に機能するが，今日のように産業がある程度しっかりした基盤を形成しつつも，市場の成長が止まったような段階では発展を阻害しかねない．「透明性」や「説明責任」の必要性を主張しようとしているのではない．そうではなく，今後は，内部で共有している建築の文化的背景を外部でも共感できるものにしていく姿勢がなければ，私の思う心地よさも充実感も容易には得られなくなると懸念しているのである．

私の印象では，BCS賞はその半世紀の実績にふさわしい認知を建築界においてすら得られていない．建築学科の学生でBCS賞を認知している者がどれほどいるだろうか．もし私のこの印象が正しいとすれば，BCS賞的な世界はあまりにも閉じすぎということになる．このままでは，建築界の外部に建築の文化的背景を共感してもらうことなどとうていできない．

「全員野球」であるからには，本家の甲子園球児並みに多くの人の共感を得られるものであってほしい．BCS賞の次の半世紀への期待である．

『新建築』2009年12月臨時増刊号として建築業協会賞（BCS賞）50年の受賞作品に焦点を当てた特集号『建築業協会賞50年 受賞作品を通して見る　建築1960-2009』（予価3,800円）を刊行する予定です．是非，ご覧下さい．